

今年もどうぞよろしくお願いたします



連携型認知症医療センター長 藤本直規

大切な人たちを守るためにできる事はなんでもしよう。.....

ちょうど一年前から始まった新型コロナウイルスの流行は、未知のウイルスという初めての経験からくる“不安”と“恐れ”、呼吸器感染以外に血管障害による様々な全身症状の出現、場当たりの対策、混乱するマスク情報などにもかかわらず、私たちは、大切な人たちを守ろうと“できることは何でもしよう”とマスク、消毒、換気に頑張りました。それは、認知症の人本人も同様で、マスクの不快感にはずしたがる人もいましたが、大部分の人が、“マスクしなきゃあね”と、頑張ってくれました。

“あんたたちも（スタッフのこと）大変だね”と励ましてくれました。認知症の人の能力で最後まで保たれると言われる“社会的な振る舞い（社会性の保持：上手に挨拶をするなど）”によるものでしたが、それは、無条件に発揮されるものではなく、スタッフたちの感染を防ぐという振る舞い、周りの様子に影響されるものです。スタッフたちが、毎日のように衝立や扇風機やサーキュ

レーター的位置を工夫し、頻回に机などを消毒している姿の反映と考えます。

“人という環境”が大事なものは、日々の過ごし方でも影響が出てきます。以前、周りの雰囲気に対して落ち着かなくなると部屋の外へ出て行こうとする人 A さんがいました。スタッフが慌てて追いかけて上手に連れて帰っても、参加者仲間は、“勝手に出て行ってスタッフに迷惑をかける人”と思いがちで、そんな発言も見られました。

ところが、関わり方を話し合っ、部屋から出たらスタッフがついていくところまでは同じでも、歩きながら話し合っ、駅前の公園まで出かけることにして、少し日向ぼっこをして “暖かくて気持ちよかったよ”と帰ってくると、他の参加者も “僕たちも散歩へ行きたいね”とグループに分かれて散歩に行きました。A さんの散歩は、意味のない一人歩きから、散歩したら気持ちよかったよと伝える役割に変わりました。スタッフが一人歩き中の A さんの気持ちを推し量ることができたからでした。